



毛虫はもう十枚目の葉つばを食べてしまつて、黄金色の花のすぐ近くまで登つて來ました。青空がからりと晴れて、太陽の光が、さんくくと草を照しました。黄金色の花瓣は、すっかり開いて、太陽の光を浴びて、美しく輝きました。

毛虫が食べ残しの小さな葉つばを食べようとする、空の彼方から、ちちつと飛んで來た鳥が、ちよいと毛虫をついばんで行つてしまひました。

黄金色の花は二花、三花と段々咲いて、どの花も、どの花も美しく輝きました。

入道雲とボン太郎

眞夏の陽が、かんく照りつけてゐる時でした。蜻蛉釣に行つたボン太郎は、ヤンマを追駈けて、小山のてつぺんまで駈上つてしまひました。

「あつ、ヤンマが、入道雲の中へ這入つちやつた。」

ボン太郎は青天井へによつきりと廣がつて、下界をにらまへてゐる大入道を見詰めて居りました。すると、眞白い大入道が、パチツとまたゝきをしました、ボン太郎はびつくりして、「わあーつ。」



とばかり逃出さうとすると、

「アツハハ……………」

と、大入道が大きな聲で笑ひ出しました。

ボン太郎は其の場で目を廻して、ひつくりかへつてしまひました。ボン太郎は藪竿を持つたまゝ、小山のてつぺんの草の中に倒れてゐました。段々陽がかげつて、涼しい風がそつと頬ぺたを撫でると、ボン太郎は正氣附いて、眼を開けました。

もう大入道は消えてしまつて、大空は夕焼の色で燃え立つてゐました。今咲いたばかりの月見草の花が、ボン太郎の體のまはりで、夕風にゆられてゐました。

「ボン太郎やーい。」

何處かで呼ぶ聲がしました。

「ボン太郎やーい。」

「ボン太郎やーい。」

呼び聲が、段々近づいて來ました。

ボン太郎は喜んで起き上らうとしましたが、起きられません。



「ボン太郎やーい。」

お父さんの聲がしました。

「ボン太郎やーい。」

お母さんの聲がしました。

「ボン太郎やーい。」

「ボン太郎やーい。」

すぐ其處で、お父さんの聲がします、お母さんの聲がします。けれどもボン太郎は咽喉がつまつて返事が出来ません。やつと右手に持つてゐる藪竿を上げて、動かして見せました。

「居た、ボン太郎が居た。」

「ボン太郎や、どうおしだえ。」

お父さんとお母さんが駈寄つて、ボン太郎を抱き起して呉れました。

ボン太郎は眼をバチクリさせて、ごくりと唾を吞込んで、

「大入道がにらめたよ。またたきしたよ。大きな聲で笑つたよ。」
と言ひました。